

1、午後の授業

「ではみなさんは、そういうふう川だと云われたり、乳の流れたとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところを指しながら、みんなに問をかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから4、5人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのでしたが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちでするのでした。

ところが先生は早くもそれを見附けたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかつているのでしょうか。」

ジョバンニは勢よく立ちあがりましたが、立って見るともうはつきりとそれを答えることができ

ないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすつとわらいました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。先生がまた云いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよく調べると銀河は大体何でしょう。」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたが、こんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困ったようすでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん。」と名指しました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上ったままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじっとカムパネルラを見ていましたが、急いで「では。よし。」と云いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きな望遠鏡で見ますと、もうたくさんのお小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうですね。」

ジョバンニはまっ赤になってうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼のなかには涙がいつぱいになりました。そうだ僕は知っていたのだ、勿論カムパネルラも知っている、それはいつか

カムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといっしよに読んだ雑誌のなかにあったのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書斎から巨きな本をもってきて、ぎんがというところをひろげ、まっ黒な頁いっぱい白い点々のある美しい写真を2人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈もなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなとはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云わないようになったので、カムパネルラがそれを知って気の毒がつてわざと返事をしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのです。

先生はまた云いました。

「ですからもしこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その1つ1つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるならもつと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいる脂油の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光がある速さで

伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮んでいるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲んでいるわけです。そしてその天の川の水のなかから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集って見えしたがって白くぼんやり見えるのです。この模型をごらんなさい。」

先生は中にたくさん光る砂のつぶの入った大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちょうどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレンズの中を見まわすとしてごらんなさい。こつちの方はレンズが薄いのでわずかの光る粒——即ち星しか見えないでしょう。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるというこれがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまざまの星についてはもう時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらんなさい。ではここまでです。本や

ノートをおしまいなさい。」

そして教室中はしばらく机の蓋をあけたりしめたり本を重ねたりする音がいつぱいでしたがまもなくみんなはきちんと立って礼をすると教室を出ました。

2、活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の7、8人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅の桜の木ところに集まっていました。それはこんやの星祭に青いあかりをこしらえて川へ流す烏瓜を取りに行く相談らしかったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたりひのきの枝にあかりをつけたりいろいろ仕度をしているのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を3つ曲つてある大きな活版処にはいつてすぐ入口の計算台に居ただぶだぶの白いシャツを着た人におじぎをしてジョバンニは靴をぬいで上りますと、突き当りの大きな扉をあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついてたくさんの輪転器がばたりばたりとまわり、きれで頭をしばったりラムプシェードをかけたたりした人たちが、何か歌うように読んだり数え

たりしながらたくさん働いて居りました。

ジョバンニはすぐ入口から3番目の高い卓子に座った人の所へ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚をさがしてから、

「これだけ拾って行けるかね。」と云いながら、1枚の紙切れを渡しました。ジョバンニはその人の卓子の足もとから1つの小さな平たい函をとりだして向うの電燈のたくさんついた、たてかけてある壁の隅の所へしゃがみ込むと小さなピンセットでまるで粟粒ぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。青い胸あてをした人がジョバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う。」と云いますと、近くの45人の人たちが声もたてずこつちも向かずに冷くわらいました。

ジョバンニは何べんも眼を拭いながら活字をだんだんひろいました。

6時がうつてしばらくたつたころ、ジョバンニは拾った活字をいっぱいに入れた平たい箱をもういちど手にもった紙きれと引き合せてから、さっきの卓子の人へ持って来ました。その人は黙ってそれを受け取って微かにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉をあけてさっきの計算台のところに来ました。するとさっきの白服を着た人がやっぱりだまって小さな銀貨を1つジョバンニに渡しました。ジョバンニは俄かに顔いろがよくなって威勢よくおじぎをすると台の下に置いた鞆をもつておもてへ飛びだしました。それから元気よく口笛を吹きながらパン屋へ寄ってパンの塊を1つと角砂糖を1袋買いますと一目散に走りだしました。

3、家

ジョバンニが勢よく帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。その3つならんだ入口の1番左側には空箱に紫いろのケールやアスパラガスが植えてあつて小さな2つの窓には日覆いが下りたままになっていました。

「お母さん。いま帰ったよ。工合悪くなかったの。」ジョバンニは靴をぬぎながら云いました。

「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかったろう。今日は涼しくてね。わたしはずうっと工合がいいよ。」

ジョバンニは玄関を上って行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口の室に白い巾を被って寝んでいたのです。ジョバンニは窓をあけました。

「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思って。」

「ああ、お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

「お母さん。姉さんはいつ帰ったの。」

「ああ3時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」

「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか。」

「来なかったろうかねえ。」

「ぼく行つてとつて来よう。」

「あああたしはゆっくりでいいんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ。」

「ではぼくたべよう。」

ジョバンニは窓のところからトマトの皿をとつてパンといっしょにしばらくむしゃむしゃたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつと間もなく帰つてくると思うよ。」

「あああたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの。」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかったと書いてあつたよ。」

「ああだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない。」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へ入るようなそんな悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかいの角だの今だつてみんな標本室にあるんだ。6年生なんか授業のとき先生がかわるがわる教室へ持つて行くよ。一昨年修学旅行で〔以下数文字分空白〕」

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてくるといったねえ。」

「みんながぼくにあうとそれを云うよ。ひやかすように云うんだ。」

「おまえに悪口を云うの。」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云わない。カムパネルラはみんながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ。」

「あの人はうちのお父さんとはちようにおまえたちのように小さいときからのお友達だったそうだよ。」

「ああだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行つたよ。あのころはよかつ

たなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄った。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があったんだ。レールを7つ組み合せると円くなってそれに電柱や信号標もついていて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなったとき石油をつかったら、罐がすっかり煤けたよ。」

「そうかねえ。」

「いまでも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家中まだしいんとしているからな。」

「早いからねえ。」

「ザウエルという犬がいるよ。しつぽがまるで箒のようだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついでくるよ。ずうつと町の角までついてくる。もつとついてくることもあるよ。今夜はみんなで烏瓜のあかりを川へながしに行くんだって。きつと犬もついて行くよ。」

「そうだ。今晚は銀河のお祭だねえ。」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

「ああ行っておいで。川へはいらないでね。」

「ああぼく岸から見ただけなんだ。1時間で行ってくるよ。」

「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一緒なら心配はないから。」

「ああきつと一緒にだよ。お母さん、窓をしめて置こうか。」

「ああ、どうか。もう涼しいからね」

ジョバンニは立って窓をしめお皿やパンの袋を片附けると勢よく靴をはいて

「では1時間半で帰ってくるよ。」と云いながら暗い戸口を出ました。

4、ケンタウル祭の夜

ジョバンニは、口笛を吹いているようなさびしい口付きで、檜のまつ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。

坂の下に大きな1つの街燈が、青白く立派に光って立っていました。ジョバンニが、どんどん電燈の方へ下りて行きますと、いままでばけものののように、長くぼんやり、うしろへ引いていたジョバンニの影ぼうしは、だんだん濃く黒くはつきりなつて、足をあげたり手を振ったり、ジョバンニの横の方へまわつて来るのでした。

(ぼくは立派な機関車だ。ここは勾配だから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越す。そうら、こんどはぼくの影法師はコムパスだ。あんなにくるつとまわつて、前の方へ来た。)

とジョバンニが思いながら、大股にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひるまのザネリが、新らしいえりの尖ったシャツを着て電燈の向う側の暗い小路から出て来て、ひらつとジョバンニと

すれちがいました。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」ジョバンニがまだそう云ってしまわないうちに、

「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ。」その子が投げつけるようにうしろから叫びました。

ジョバンニは、ぱつと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るように思いました。

「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向うのひばの植った家の中へは行っていました。

「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのだろう。走るときはまるで鼠のようなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのはザネリがばかなからだ。」

ジョバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、さまざまの灯や木の枝で、すっかりきれいに飾られた街を通って行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がついて、1秒ごとに石でこさえたふくろうの赤い眼が、くるつくるつとうごいたり、いろいろな宝石が海のような色をした厚い硝子の盤に載って星のようにゆっくり循環ったり、また向う側から、銅の人馬がゆっくりこつちへ

まわって来たりするのです。そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾ってありました。

ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはずうっと小さかったのですがその日と時間に合せて盤をまわすと、そのとき出ているそらがそのまま楕円形のなかにめぐってあらわれるようになって居りやはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむったような帯になってその下の方ではかすかに爆発して湯気でもあげているように見えるのです。またそのうしろには3本の脚のついた小さな望遠鏡が黄いろに光って立っていましたいちばんうしろの壁には空じゅうの星座をふしぎな獣や蛇や魚や瓶の形に書いた大きな図がかかっていました。ほんとうにこんなような蝸だの勇士だのそらにぎしり居るだらうか、ああぼくはその中をどこまでも歩いて見たいと思つてたりしてしばらくぼんやり立って居ました。

それから俄かにお母さんの牛乳のことを思いだしてジョバンニはその店をはなれました。そしてきゆうくつな上着の肩を気にしながらそれでもわざと胸を張って大きく手を振って町を通って行き

ました。

空気は澄みきって、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街燈はみなまっ青なもみや檜の枝で包まれ、電気会社の前の6本のプラタヌスの木などは、中に沢山の豆電燈がついて、ほんとうにそこらは人魚の都のように見えるのでした。子どもらは、みんな新らしい折のついた着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、

「ケンタウルス、露をふらせ。」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしそうに遊んでいるのでした。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首を垂れて、そこらのにぎやかさとはまるでちがったことを考えながら、牛乳屋の方へ急ぐのでした。

ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾本も幾本も、高く星ぞらに浮んでいるところに来ていました。その牛乳屋の黒い門を入り、牛の匂のするうすくらい台所の前に立って、ジョバンニは帽子をぬいで「今晚は、」と云いましたら、家の中はいいんとして誰も居たようではありませんでした。

「今晚は、ごめんなさい。」ジョバンニはまっすぐに立ってまた叫びました。するとしばらくたって

から、年老った女の人が、どこか工合が悪いようにそろそろと出て来て何か用かと口の中で云いました。

「あの、今日、牛乳が僕んとこへ来なかったので、貰いにあがったんです。」ジヨバンニが一生懸命勢よく云いました。

「いま誰もいないでわかりません。あしたにして下さい。」

その人は、赤い眼の下のところを擦りながら、ジヨバンニを見おろして云いました。

「おっかさんが病氣なんですから今晚でないと困るんです。」

「ではもう少したつてから来てください。」その人はもう行つてしまひそうでした。

「そうですか。ではありがとう。」ジヨバンニは、お辞儀をして台所から出ました。

十字になった町のかどを、まがろうとしましたら、向うの橋へ行く方の雜貨店の前で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、67人の生徒らが、口笛を吹いたり笑ったりして、めいめい烏瓜の燈火を持ってやって来るのを見ました。その笑い声も口笛も、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジヨバンニの同級の子供らだったのです。ジヨバンニは思わずどきっとして戻ろうとしまし

たが、思い直して、一そう勢よくそっちへ歩いて行きました。

「川へ行くの。」ジョバンニが云おうとして、少しのどがつまったように思ったとき、

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」さっきのザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」すぐみんなが、続いて叫びました。ジョバンニは真っ赤になって、もう歩いているかもわからず、急いで行きすぎようと思いましたら、そのなかにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは気の毒そうに、だまって少しわらって、怒らないだろうかというようにジョバンニの方を見ていました。

ジョバンニは、遁げるようにその眼を避け、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過ぎて行って間もなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふりかえって見ましたら、ザネリがやはりふりかえって見ていました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向うにぼんやり見える橋の方へ歩いて行ってしまったのです。ジョバンニは、なんとも云えずさびしくなって、いきなり走り出しました。すると耳に手をあてて、わああと云いながら片足でぴょんぴょん跳んでいた小さな子供らは、ジョバンニが面白くてかけるのだと思ってわあいと叫びました。ま

もなくジョバンニは黒い丘の方へ急ぎました。

5、天氣輪の柱

牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は、北の大熊星の下に、ぼんやりふだんよりも低く連つて見えました。

ジョバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんどんのぼつて行きました。まっくらな草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らしだされてあつたのです。草の中には、ぴかぴか青びかりを出す小さな虫もいて、ある葉は青くすかし出され、ジョバンニは、さつきみんなの持つて行つた烏瓜のあかりのようだとも思いました。

そのまっ黒な、松や檜の林を越えると、俄かにがらんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から北へ亘っているのが見え、また頂の、天氣輪の柱も見わけられたのでした。つりがねそうか野ぎくかの花が、そこらいちめんに、夢の中からでも薫りだしたというように咲き、鳥が1疋、丘の上を

鳴き続けながら通って行きました。

ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どこどかするからだを、つめたい草に投げました。

町の灯は、暗の中をまるで海の底のお宮のけしきのようにともし、子供らの歌う声や口笛、きれぎれの叫び声もかすかに聞えて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草もしずかにそよぎ、ジョバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷されました。ジョバンニは町のはずれから遠く黒くひろがった野原を見わたしました。

そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は1列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、苹果を剥いたり、わらったり、いろいろな風になっていると考えますと、ジョバンニは、もう何とも云えずかなしくなつて、また眼をそらに挙げました。

あああの白いそらの帯がみんな星だというぞ。

ところがいくら見ていても、そのそらはひる先生の云ったような、がらんとした冷いとこだとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やある野原のように考えられて仕方なかったのです。そしてジョバンニは青い琴の星が、3つにも4つにもなっ

て、ちらちら瞬き、脚が何べんも出たり引つ込んだりして、とうとう蕈のように長く延びるのを見ました。またすぐ眼の下のまちまでがやっぱりぼんやりしたたくさん星の集りか1つの大きなけむりかのように見えるように思いました。

6、銀河ステーション

そしてジョバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になって、しばらく蛍のように、ぺかぺか消えたりともったりしているのを見ました。それはだんだんはつきりして、とうとうりんとうごかないようになり、濃い銅青のそらの野原にたちました。いま新らしく灼いたばかりの青い銅の板のような、そらの野原に、まっすぐにすきと立ったのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと云う声が出たと思ふといきなり眼の前が、ぱっと明るくなって、まるで億万の蛍烏賊の火を一ぺんに化石させて、そら中に沈めたという工合、またダイヤモンド会社で、ねだんがやすくならないために、わざと獲れないふりをして、かくして置いた金剛石を、誰かがいきなりひっくりかえして、ばら撒いたという風に、眼の前がさあっと明るくなって、ジョバンニは、思わず何べんも眼を擦ってしまいました。

気がついてみると、さっきから、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走り

つづけていたのです。ほんとうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のならんだ車室に、窓から外を見ながら座っていたのです。車室の中は、青い天蚕絨を張った腰掛けが、まるでがら明きで、向うの鼠いろのワニスを塗った壁には、真鍮の大きなぼたんが2つ光っているのです。

すぐ前の席に、ぬれたようにまっ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気が付きました。そしてそのこどもの肩のあたりが、どうも見たことのあるような気がして、そう思うと、もうどうしても誰だかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこつちも窓から顔を出そうとしたとき、俄かにその子供が頭を引つ込めて、こつちを見ました。

それはカムパネルラだったのです。

ジョバンニが、カムパネルラ、きみは前からここに居たのと云おうと思ったとき、カムパネルラが

「みんなはねずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった。」と云いました。

ジヨバンニは、（そうだ、ぼくたちはいま、いっしょにさそって出掛けたのだ。）とおもいながら、「どこかで待っていていようか」と云いました。するとカムパネルラは

「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎えにきたんだ。」

カムパネルラは、なぜかそう云いながら、少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいというふうでした。するとジヨバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるというふうな、おかしい気持ちがしてだまってしまいました。

ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直って、勢よく云いました。

「ああしまった。ぼく、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構わない。もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんとうにすきだ。川の遠くを飛んでいたって、ぼくはきっと見える。」そして、カムパネルラは、円い板のようになった地図を、しきりにぐるぐるまわして見ていました。まったくその中に、白くあらわされた天の川の左の岸に沿って一条の鉄道線路が、南へ南へとたどって行くのでした。そしてその地図の立派なことは、夜のようにまっ黒な盤の上に、

11の停車場や三角標、泉水や森が、青や橙や緑や、うつくしい光でちりばめられてありました。ジョバンニはなんだかその地図をどこかで見たようにおもいました。

「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ。」

ジョバンニが云いました。

「銀河ステーションで、もらったんだ。君もらわなかったの。」

「ああ、ぼく銀河ステーションを通ったろうか。いまぼくたちの居るところ、ここだろう。」

ジョバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指しました。

「そうだ。おや、あの河原は月夜だろうか。」

そっちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ。」ジョバンニは云いながら、まるでね上りたいくらい愉快になって、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生けん命延びあがって、その天の川の水を、見きわめようとしてましたが、はじめはどうしてもそれが、

はつきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとおって、ときどき眼の加減か、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のようにながらりと光ったりしながら、声もなくどんどん流れて行き、野原にはあつちにもこつちにも、燐光の三角標が、うつくしく立っていたのです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙や黄いろではつきりし、近いものは青白く少しかすんで、或いは三角形、或いは4辺形、あるいは電や鎖の形、さまざまにならんで、野原いっぱい光っているのです。ジョバンニは、まるでどきどきして、頭をやけに振りまわした。するとほんとうに、そのきれいな野原中の青や橙や、いろいろかがよく三角標も、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたり顫えたりしました。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に来た。」ジョバンニは云いました。

「それにこの汽車石炭をたいていないねえ。」ジョバンニが左手をつき出して窓から前の方を見ながら云いました。

「アルコールか電気だろう。」カムパネルラが云いました。

ごとごとごとごと、その小さなきれいな汽車は、そらのすすきの風にひるがえる中を、天の川の

水や、三角点の青じろい微光の中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのでした。

「ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ。」カムパネルラが、窓の外を指さして云いました。

線路のへりになったみじかい芝草の中に、月長石でも刻まれたような、すばらしい紫のりんどうの花が咲いていました。

「ほく、飛び下りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせようか。」ジヨバンニは胸を躍らせて云いました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行ってしまったから。」

カムパネルラが、そう云ってしまうかしまわないうち、次のりんどうの花が、いっぱい光って過ぎて行きました。

と思つたら、もう次から次から、たくさんいろいろな底をもったりりんどうの花のコップが、湧くように、雨のように、眼の前を通り、三角標の列は、けむるように燃えるように、いよいよ光って立ったのです。

7、北十字とプリオシン海岸

「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか。」

いきなり、カムパネルラが、思い切ったというように、少しどもりながら、急きこんで云いました。
ジョバンニは、

（ああ、そうだ、ぼくのおっかさんは、あの遠い1つのちりのように見える橙いろの三角標のあたりにいらっしやって、いまぼくのことを考えているんだった。）と思いながら、ぼんやりしてだまっていました。

「ぼくはおっかさんが、ほんとうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだろう。」カムパネルラは、なんだか、泣きだしたいのを、一生けん命こらえているようでした。

「きみのおっかさんは、なんにもひどいことないじゃないの。」ジョバンニはびっくりして叫びまし

た。

「ぼくわからない。けれども、誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるして下さると思う。」カムパネルラは、なにかほんとうに決心しているように見えました。

俄かに、車のなかで、ぱつと白く明るくなりました。見ると、もうじつに、金剛石や草の露やあらゆる立派さをあつめたような、きらびやかな銀河の河床の上を水は声もなくかたちもなく流れ、その流れのまん中に、ぼうつと青白く後光の射した1つの島が見えるのでした。その島の平らないただきに、立派な眼もさめるような、白い十字架がたつて、それはもう凍った北極の雪で鑄たといったらいいか、すきつとした金いろの円光をいただいて、しずかに永久に立っているのです。

「ハルレヤ、ハルレヤ。」前からもうしろからも声が起りました。ふりかえって見ると、車室の中の旅人たちは、みなまっすぐにきもののひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の数珠をかけたたり、どの人もつつましく指を組み合わせ、そっちに祈っているのです。思わず2人もまっすぐに立ちあがりました。カムパネルラの頬は、まるで熟した苹果のあかしのようにつくしくかが

やいて見えました。

そして島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行きました。

向う岸も、青じろくぼうつと光ってけむり、時々、やつぱりすすきが風にひるがえるらしく、さつとその銀いろがけむって、息でもかけたように見え、また、たくさんのりんどうの花が、草をかくれたり出たりするのは、やさしい狐火のように思われました。

それもほんのちよつとの間、川と汽車との間は、すすきの列でさえぎられ、白鳥の島は、2度ばかり、うしろの方に見えましたが、じきもうずうつと遠く小さく、絵のようになってしまい、またすすきがざわざわ鳴って、とうとうすっかり見えなくなってしまう。ジョバンニのうしろには、いつから乗っていたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカトリック風の尼さんが、まん円な緑の瞳を、じつとまっすぐに落して、まだ何かことばか声かが、そっちから伝わって来るのを、虔んで聞いているというように見えました。旅人たちはしずかに席に戻り、2人も胸いっぱいのかなしみに似た新らしい気持ち、何気なくちがった語で、そつと談し合ったのです。

「もうじき白鳥の停車場だねえ。」

「ああ、11時かつきりには着くんだよ。」

早くも、シグナルの緑の燈と、ぼんやり白い柱とが、ちらつと窓のそとを過ぎ、それから硫黄のほのおのようなくらいぼんやりした転てつ機の前のあかりが窓の下を通り、汽車はだんだんゆるやかになって、間もなくプラットホームの1列の電燈が、うつくしく規則正しくあらわれ、それがだんだん大きくなってひろがって、2人は丁度白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。

さわやかな秋の時計の盤面には、青く灼かれたはがねの2本の針が、くつきり11時を指しました。みんなは、一ぺんに下りて、車室の中はがらんとなくなりました。

〔20分停車〕と時計の下に書いてありました。

「ぼくたちも降りて見ようか。」ジヨバンニが云いました。

「降りよう。」

2人は1度にはねあがってドアを飛び出して改札口へかけて行きました。ところが改札口には、明るい紫がかった電燈が、1つ点いているばかり、誰も居ませんでした。そこら中を見ても、駅長や赤帽らしい人の、影もなかったのです。

2人は、駐車場の前の、水晶細工のように見える銀杏の木に囲まれた、小さな広場に出ました。そこから幅の広いみちが、まっすぐに銀河の青光の中へ通っていました。

さきに降りた人たちは、もうどこへ行ったか1人も見えませんでした。2人がその白い道を、肩をならべて行きますと、2人の影は、ちょうど四方に窓のある室の中の、2本の柱の影のように、また2つの車輪の輻のように幾本も幾本も四方へ出るのです。そして間もなく、あの汽車から見えたきれいな河原にきました。

カムパネルラは、そのきれいな砂を1つまみ、掌にひろげ、指できしきしさせながら、夢のように云っているのです。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている。」

「そうだ。」どこでぼくは、そんなこと習ったろうと思ひながら、ジョバンニもぼんやり答えています。

河原の礫は、みんなすきとおって、たしかに水晶や黄玉や、またくしゃくしゃの皺曲をあらわしたのや、また稜から霧のような青白い光を出す銅玉やらでした。ジョバンニは、走ってその渚に行

って、水に手をひたしました。けれどもあやしいその銀河の水は、水素よりもつとすきとおっていたのです。それでもたしかに流れていたことは、2人の手首の、水にひたったところが、少し水銀いろに浮いたように見え、その手首にぶつつかつてできた波は、うつくしい燐光をあげて、ちらちらと燃えるように見えたのもわかりました。

川上の方を見ると、すすきのいつぱいに生えている崖の下に、白い岩が、まるで運動場のように平らに川に沿って出ているのでした。そこに小さな56人の人かげが、何か掘り出すか埋めるかしているらしく、立ったり屈んだり、時々なにかの道具が、ピカッと光ったりしました。

「行ってみよう。」2人は、まるで1度に叫んで、そっちの方へ走りました。その白い岩になった処の入口に、

「プリオシン海岸」という、瀬戸物のつるつるした標札が立って、向うの渚には、ところどころ、細い鉄の欄干も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ。」カムパネルラが、不思議そうに立ちどまって、岩から黒い細長いさきの尖ったくるみの実のようなものをひろいました。

「くるみの実だよ。そら、沢山ある。流れて来たんじゃない。岩の中に入ってるんだ。」

「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない。」

「早くあすこへ行つて見よう。きっと何か掘ってるから。」

2人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさっきの方へ近よって行きました。左手の渚には、波がやさしい稲妻のように燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀や貝殻でこさえたようなすすきの穂がゆれたのです。

だんだん近付いて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけながら、鶴嘴をふりあげたり、スコップをつかったりしている、3人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図をしていました。

「そのその突起を壊さないように。スコップを使いたまえ、スコップを。おっと、もう少し遠くから掘って。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。」

見ると、その白い柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が、横に倒れて潰れたという風になって、半分以上掘り出されていました。そして気をつけて見ると、そこらには、蹄の2つあ

る足跡のついた岩が、四角に10ばかり、きれいに切り取られて番号がつけられてありました。

「君たちは参観かね。」その大学士らしい人が、眼鏡をきらつとさせて、こつちを見て話しかけました。

「くるみが沢山あったろう。それはまあ、ざっと120万年ぐらい前のくるみだよ。ごく新しい方さ。ここは120万年前、第3紀のあとのころは海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま川の流れているところに、そっくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。このけものかね、これはボスといってね、おいしい、そこつるはしはよしたまえ。ていねいに鑿でやってくれたまえ。ボスといってね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ。」

「標本にするんですか。」

「いや、証明するに要るんだ。ぼくらから見ると、ここは厚い立派な地層で、120万年ぐらい前にできたという証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがったやつからみてもやつぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空に見えやしないかということなのだ。わかったかい。けれども、おいしい。そこもスコープではいけない。そのすぐ下に肋骨が埋もれてる筈じ

やないか。」大学士はあわてて走って行きました。

「もう時間だよ。行こう。」カムパネルラが地図と腕時計とをくらべながら云いました。

「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします。」ジヨバンニは、ていねいに大学士におじぎしました。

「そうですか。いや、さよなら。」大学士は、また忙がしそうに、あちこち歩きまわって監督をはじめました。2人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないように走りまわりました。そしてほんとうに、風のように走れたのです。息も切れず膝もあつくありませんでした。

こんなにかけるなら、もう世界中だつてかけれると、ジヨバンニは思いました。

そして2人は、前のあの河原を通り、改札口の電燈がだんだん大きくなって、間もなく2人は、もとの車室の席に座って、いま行つて来た方を、窓から見えていました。

8、鳥を捕る人

「ここへかけてもようございますか。」

がさがさした、けれども親切そうな、大人の声が、2人のうしろで聞えました。

それは、茶いろの少しぼろぼろの外套を着て、白い巾でつつんだ荷物を、2つに分けて肩に掛けた、赤髯のせなかのかがんだ人でした。

「ええ、いいんです。」ジョバンニは、少し肩をすぼめて挨拶しました。その人は、ひげの中でかすかに微笑いながら荷物をゆっくり網棚にのせました。ジョバンニは、なにか大へんさびしいようなかなしいような気がして、だまって正面の時計を見ていましたら、ずうっと前の方で、硝子の笛のようなものが鳴りました。汽車はもう、しずかにうごいていたのです。カムパネルラは、車室の天井を、あちこち見ていました。その1つのあかりに黒い甲虫がとまってその影が大きく天井にうつっていたのです。赤ひげの人は、なになつかしそうにわらいながら、ジョバンニやカムパネルラの

ようすを見ていました。汽車はもうだんだん早くなって、すすきと川と、かわるがわる窓の外から光りました。

赤ひげの人が、少しおずおずしながら、2人に訊きました。

「あなた方は、どちらへいらつしやるんですか。」

「どこまでも行くんです。」ジョバンニは、少しきまり悪そうに答えました。

「それはいいね。この汽車は、じつさい、どこまででも行きますぜ。」

「あなたはどこへ行くんです。」カムパネルラが、いきなり、喧嘩のようにたずねましたので、ジョバンニは、思わずわらいました。すると、向うの席に居た、尖った帽子をかぶり、大きな鍵を腰に下げた人も、ちらつとこつちを見てわらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑いだしてしまいました。ところがその人は別に怒ったでもなく、頬をびくびくしながら返事しました。

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売でね。」

「何鳥ですか。」

「鶴や雁です。さきも白鳥もです。」

「鶴はたくさんいますか。」

「居ますとも、さつきから鳴いてまさあ。聞かなかったのですか。」

「いいえ。」

「いまでも聞えるじゃありませんか。そら、耳をすまして聴いてごらんさい。」

2人は眼を挙げ、耳をすましました。ごとごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧くような音が聞えて来るのでした。

「鶴、どうしてとるんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺ですか。」

「鷺です。」ジョバンニは、どっちでもいいと思いつながら答えました。

「そいつはな、雑作ない。さぎというものは、みんな天の川の砂が凝って、ぽおつとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待っていて、鷺がみんな、脚をこういう風にして下りてくるところを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、ぴたつと押えちまうんです。するともう鷺は、かたまつて安心して死んじまいます。あとはもう、わかり切つてまさあ。押し葉にするだ

けです。」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか。」

「おかしいねえ。」カムパネルラが首をかしげました。

「おかしいも不審もありませんや。そら。」その男は立って、網棚から包みをおろして、手ばやくく
るくと解きました。

「さあ、ごらんなさい。いまとって来たばかりです。」

「ほんとうに鷺だねえ。」2人は思わず叫びました。まっ白な、あのさっきの北の十字架のように光
る鷺のからだだが、10ばかり、少しひらべったくなって、黒い脚をちぢめて、浮彫のようにならんでい
たのです。

「眼をつぶってるね。」カムパネルラは、指でそつと、鷺の3日月がたの白い瞑った眼にさわしまし
た。頭の上の槍のような白い毛もちゃんとついていました。

「ね、そうでしょう。」鳥捕りは風呂敷を重ねて、またくるくると包んで紐でくくりました。誰がい

つたいこらで鷺なんぞ喰べるだろうとジョバンニは思いながら訊きました。

「鷺はおいしいんですか。」

「ええ、毎日注文があります。しかし雁の方が、もっと売れます。雁の方がずっと柄がいいし、第一手数がありませんからな。そら。」鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。すると黄と青じろとまだらになって、なにかのあかりのようにひかる雁が、ちようどさっきの鷺のように、くちばしを揃えて、少し扁べったくなって、ならんでいました。

「こっちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。」鳥捕りは、黄いろな雁の足を、軽くひっぱりました。するとそれは、チョコレートでもできているように、すつときれいにはなれました。

「どうです。すこしたべてごらんなさい。」鳥捕りは、それを2つにちぎってわたしました。ジョバンニは、ちよつと喰べてみて、（なんだ、やつぱりこいつはお菓子だ。チョコレートよりも、もつとおいしいけれども、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこかそらの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、大へん気の毒だ。）と

おもいながら、やつぱりぼくぼくそれをたべていました。

「もしおあがりなさい。」鳥捕りがまた包みを出しました。ジョバンニは、もつとたたえたかったのですけれども、

「ええ、ありがとう。」と云つて遠慮したら、鳥捕りは、こんどは向うの席の、鍵をもった人に出しました。

「いや、商売ものを貰っちゃすみませんな。」その人は、帽子をとりました。

「いいえ、どういたしまして。どうです、今年の渡り鳥の景気は。」

「いや、すてきなもんですよ。一昨日の第2限ころなんか、なぜ燈台の灯を、規則以外に聞かされて、あつちからもこつちからも、電話で故障が来ましたが、なあに、こつちがやるんじゃない、渡り鳥どもが、まっ黒にかたまつて、あかしの前を通るのですから仕方ありませんや。わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのところへ持つて来たつて仕方がねえや、ばさばさのマントを着て脚と口との途方もなく細い大将へやれて、斯う云つてやりましたがね、はっは。」

すすきがなくなつたために、向うの野原から、ぱつとあかりが射して来ました。

「鷺の方はなぜ手数なんですか。」カムパネルラは、さっきから、訊こうと思っていたのです。

「それはね、鷺を喰べるには、」鳥捕りは、こっちに向き直りました。

「天の川の水あかりに、10日もつるして置くかね、そうでなければ、砂に34日うずめなければいけない。そうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるようになるよ。」

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう。」やっぱりおなじことを考えていたとみえて、カムパネルラが、思い切ったというように、尋ねました。鳥捕りは、何か大へんあわてた風で、

「そうそう、ここで降りなければ。」と云いながら、立つて荷物をとったと思うと、もう見えなくなっていました。

「どこへ行ったんだろう。」

2人は顔を見合せましたら、燈台守は、にやにや笑って、少し伸びあがるようにしながら、2人の横の窓の外をのぞきました。2人もそっちを見ましたら、たったいまの鳥捕りが、黄いろと青じろの、うつくしい燐光を出す、いちめんのかわらははこぐさの上に立って、まじめな顔をして両手をひろげて、じっとそらを見ていたのです。

「あすこへ行つてゐる。ずいぶん奇体だねえ。きつとまた鳥をつかまえるとこだねえ。汽車が走つて行かないうちに、早く鳥がおけるといいな。」と云つた途端、がらんとした桔梗いろの空から、さつき見たような鷺が、まるで雪の降るように、ぎやあぎやあ叫びながら、いっぱいに舞いおりて来ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだというようにほくほくして、両足をかつきり60度にかけて立つて、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を両手で片っ端から押えて、布の袋の中に入れるのでした。すると鷺は、蛍のように、袋の中でしばらく、青くぺかぺか光つたり消えたりしていましたが、おしまいとうとう、みんなぼんやり白くなって、眼をつぶるのでした。ところが、つかまえられる鳥よりは、つかまえられるで無事に天の川の砂の上に降りるものの方が多かったのです。それは見ていると、足が砂へつくや否や、まるで雪の融けるように、縮まって扁べたくなつて、間もなく熔鉾から出た銅の汁のように、砂や砂利の上にひろがり、しばらくは鳥の形が、砂についていたのでしたが、それも23度明るくなつたり暗くなつたりしているうちに、もうすっかりまわりと同じいろになつてしまふのでした。

鳥捕りは20疋ばかり、袋に入れてしまうと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあたつて、死ぬと

きのような形をしました。と思ったら、もうそこに鳥捕りの形はなくなって、却って、

「ああせいせいした。どうもからだに恰度合うほど稼いでいるくらい、いいことはありませんな。」
というききおぼえのある声が、ジョバンニの隣りにしました。見ると鳥捕りは、もうそこでとって来た鷺を、きちんとそろえて、1つずつ重ね直しているのです。

「どうしてあすこから、いっぺんにここへ来たんですか。」ジョバンニが、なんだかあたりまえのような、あたりまえでないような、おかしい感じがして問いました。

「どうしてって、来ようとしたから来たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいでですか。」

ジョバンニは、すぐ返事しようと思いましたけれども、さあ、ぜんたいどこから来たのか、もうどうしても考えつきませんでした。カムパネルラも、顔を真っ赤にして何か思い出そうとしているのです。

「ああ、遠くからですね。」鳥捕りは、わかったというように雑作なくうなずきました。

9、ジョバンニの切符

「もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらん下さい。あれが名高いアルビレオの観測所です。」

窓の外の、まるで花火でいっぱいのような、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が4一棟ばかり立って、その1つの平屋根の上に、眼もさめるような、青宝玉と黄玉の大きな2つのすきとおった球が、輪になってしずかにくるくるとまわっていました。黄いろのがだんだん向うへまわって行って、青い小さいのがこっちへ進んで来、間もなく2つのはじは、重なり合って、きれいな緑いろの両面一凸レンズのかたちをつくり、それもだんだん、まん中がふくらみ出して、とうとう青いのは、すっかりトパースの正面に来ましたので、緑の中心と黄いろな明るい環とができました。それがまただんだん横へ外れて、前のレンズの形を逆に繰り返し、とうとうすつとはなれて、サファイアは向うへめぐり、黄いろのはこっちへ進み、また丁度さっきのような風になりました。銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんとうにその黒い測候所が、睡っているように、しずかによこ

たわったのです。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……。」鳥捕りが云いかけたとき、

「切符を拝見いたします。」3人の席の横に、赤い帽子をかぶったせいの高い車掌が、いつかまっすぐに立っていて云いました。鳥捕りは、だまってかくしから、小さな紙きれを出しました。車掌はちよつと見て、すぐ眼をそらして、（あなた方のは？）というように、指をうごかしながら、手をジョバンニたちの方へ出しました。

「さあ、」ジョバンニは困って、もじもじしていましたが、カムパネルラは、わけもないという風で、小さな鼠いろの切符を出しました。ジョバンニは、すっかりあわててしまつて、もしか上着のポケットにでも、入っていたかとおもいながら、手を入れて見ましたら、何か大きな畳んだ紙きれにありました。こんなもの入っていたらうかと思つて、急いで出してみましたら、それは4つに折つたはがきぐらいの大きさの緑いろの紙でした。車掌が手を出しているもんですから何でも構わない、やつちまえと思つて渡しましたら、車掌はまっすぐに立ち直つて丁寧になんか見ていました。そして読みながら上着のぼたんやなんかしきりに直したりしてましたし燈台看守も下から

それを熱心にのぞいていましたから、ジョバンニはたしかにあれは証明書か何かだったと考えて少し胸が熱くなるような気がしました。

「これは3次空間の方からお持ちになったのですか。」車掌がたずねました。

「何だかわかりません。」もう大丈夫だと安心しながらジョバンニはそつちを見あげてくつくつ笑いました。

「よろしゅうございます。南十字へ着きますのは、次の第3時ころになります。」車掌は紙をジョバンニに渡して向うへ行きました。

カムパネルラは、その紙切れが何だったか待ち兼ねたというように急いでのできこみました。ジョバンニも全く早く見たかったのです。ところがそれはいちめん黒い唐草のような模様の中に、おかしな10ばかりの字を印刷したものでだまって見ていると何だかその中へ吸い込まれてしまうような気がするのです。すると鳥捕りが横からちらつとそれを見てあわてたように云いました。

「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。天上どこじゃない、どこでも勝手にあるける通行券です。こいつをお持ちになれば、なるほど、こんな不完全

な幻想第4次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける筈でさあ、あなた方大したもんですね。」

「何だかわかりません。」ジョバンニが赤くなつて答えながらそれを又畳んでかくしに入れました。そしてきまりが悪いのでカムパネルラと2人、また窓の外をながめていましたが、その鳥捕りの時々大したもんだというようにちらちらこつちを見ているのがぼんやりわかりました。

「もうじき鷺の停車場だよ。」カムパネルラが向う岸の、3つならんだ小さな青じろい三角標と地図とを見較べて云いました。

ジョバンニはなんだかわけもわからずににわかにとりの鳥捕りが気の毒でたまらなくなりました。鷺をつかまえてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびっくりしたように横目で見てあわててほめだしたり、そんなことをいちいち考えていると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジョバンニの持っているものでも食べるものでもなんでもやってしまいたい、もうこの人のほんとうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立つて百年つづけて立つて鳥をとってやってもいいというような気がして、どうしてももう黙っていられなくなりました。ほんとうにあなたのほしいものは一体何ですか、と訊こうとして、それではあんな

り出し抜けだから、どうしようかと考えて振り返って見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りが居ませんでした。網棚の上には白い荷物も見えなかったのです。また窓の外で足をふんばってそらを見上げて鷺を捕る支度をしているのかと思って、急いでそちを見ましたが、外はいちめんのうつくしい砂子と白いすすきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせなかも尖った帽子も見えませんでした。

「あの人どこへ行つたろう。」カムパネルラもぼんやりそう云っていました。

「どこへ行つたろう。一体どこでまたあうのだろう。僕はどうしても少しあの人に物を言わなかったらう。」

「ああ、僕もそう思っているよ。」

「僕はある人が邪魔なような気がしたんだ。だから僕は太へんつらい。」ジヨバンニはこんな変てこな気もちは、ほんとうにはじめてだし、こんなこと今まで云ったこともないと思いました。

「何だか苹果の匂がする。僕いま苹果のこと考えたためだろうか。」カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。

「ほんとうに苹果の匂だよ。それから野茨の匂もする。」ジヨバンニもそこらを見ましたがやっぱり

それは窓からでも入って来るらしいのでした。いま秋だから野茨の花の匂のする筈はないとジョバンニは思いました。

そしたら俄かにそこに、つやつやした黒い髪の6つばかりの男の子が赤いジャケツのぼたんもかけずひどくびっくりしたような顔をしてがたがたふるえてはだしで立っていました。隣りには黒い洋服をきちんと着たせいの高い青年が一ぱいに風に吹かれているけやきの木のような姿勢で、男の子の手をしつかりひいて立っていました。

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだわ。」青年のうしろにもひとり12ばかりの眼の茶いろな可愛らしい女の子が黒い外套を着て青年の腕にすがって不思議そうに窓の外を見ているのでした。

「ああ、ここはランカシャイヤだ。いや、コンネクテカット州だ。いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことはありません。わたくしたちは神さまに召されているのです。」黒服の青年はよろこびにかがやいてその女の子に云いました。けれどもなぜかまた額に深く皺を刻んで、それに大へんつかれているらしく、無理に笑いながら男の子をジョバンニのとなりに座らせました。

それから女の子にやさしくカムパネルラのとなりの席を指さしました。女の子はすなおにそこへ座って、きちんと両手を組み合せました。

「ばくおおねえさんのところへ行くんだよう。」腰掛けたばかりの男の子は顔を変にして燈台看守の向うの席に座ったばかりの青年に云いました。青年は何とも云えず悲しそうな顔をして、じっとその子の、ちぢれてぬれた頭を見ました。女の子は、いきなり両手を顔にあててしくしく泣いてしまいました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらっしやいます。それよりも、おつかさんはどんなに永く待っていらっしやったでしょう。わたしの大事なタダシはいまどんな歌をうたっているだろう、雪の降る朝にみんなと手をつないでぐるぐるにわたこのやぶをまわってあそんでいるだろうかとかえたりほんとうに待って心配していらっしやるんですから、早く行っておつかさんにお目にかかりましょうね。」

「うん、だけど僕、船に乗らなければよかったなあ。」

「ええ、けれど、ごらんなさい、そら、どうです、あの立派な川、ね、あすこはあの夏中、ツインクル、

ツインクル、リトル、スター　をうたつてやすむとき、いつも窓からぼんやり白く見えていたでしょう。あそこですよ。ね、きれいでしょう、あんなに光っています。」

泣いていた姉もハンケチで眼をふいて外を見ました。青年は教えるようにそつと姉弟にまた云いました。

「わたしたちはもうなんにもかなしいことないのです。わたしたちはこんないところを旅して、じき神さまのとこへ行きます。そこならもうほんとうに明るくて匂がよくて立派な人たちでいっぱいです。そしてわたしたちの代りにボートへ乗れた人たちは、きつとみんな助けられて、心配して待っているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へやら行くのです。さあ、もうじきですから元氣を出しておもしろくうたつて行きましょう。」青年は男の子のぬれたような黒い髪をなで、みんなを慰めながら、自分もだんだん顔いろがかがやいて来ました。

「あなた方はどちらからいらつしやったのですか。どうなすつたのですか。」さっきの燈台看守がやつと少しわかったように青年にたずねました。青年はかすかにわらいました。

「いえ、氷山にぶつつかつて船が沈みましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急な用得2ヶ月

前一足さきに本国へお帰りになったのであとから発ったのです。私は大学へはいついて、家庭教師にやとわれていたのです。ところがちょうど12日目、今日か昨日のあたりです、船が氷山にぶつかって一ぺんに傾きもう沈みかけました。月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かったのです。ところがボートは左舷の方半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となって、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いてそして子供たちのために祈って呉れました。けれどもそこからボートまでのところにはまだまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居て、とても押しのける勇気がなかったのです。それでもわたくしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思いましたが前にいる子供らを押しのけようと思いました。けれどもまたそんなにして助けてあげるよりはこのまま神のお前にみんなで行く方がほんとうにこの方たちの幸福だとも思いました。それからまたその神にそむく罪はわたくしひとりです。よってぜひとも助けてあげようと思いました。けれどもどうして見ているとそれができないのでした。子どもらばかりボートの中へはなしてやってお母さんが狂気のようにキスを送りお父さんがかなしいのをじっと

こらえてまっすぐに立っているなどとてももう腸もちぎれるようでした。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私はもうすっかり覚悟してこの人たち2人を抱いて、浮べるだけは浮ぼうとかたまって船の沈むのを待っていました。誰が投げたかライフブイが1つ飛んで来ましたけれども滑ってずうっと向うへ行ってしまった。私は一生けん命で甲板の格子になったところをはなして、3人それにしっかりとりつきました。どこからともなく 番の声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたいました。そのとき俄かに大きな音がして私たちは水に落ちもう渦に入ったと思いながらしっかりこの人たちをだいてそれからぼうとしたと思つたらもうここへ来ていたのです。この方たちのお母さんは一昨年没くなられました。ええボートはきつと助かったにちがいありません、何せよほど熟練な水夫たちが漕いですばやく船からはなれていましたから。」

そこから小さいのりの声が聞えジョバンニもカムパネルラもいままで忘れていたいろいろのことをぼんやり思い出して眼が熱くなりました。

（ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかったろうか。その氷山の流れる北のはての

海で、小さな船に乗って、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかつて、たれかが一生けんめいはたらいっている。ぼくはそのひとにほんとうに気の毒でそしてすまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのためにいったいどうしたらいいのだろう。ジョバンニは首を垂れて、すっかりふさぎ込んでしまいました。

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただしいみちを進む中でのできごとなら峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく！あしずつですから。」

燈台守がなぐさめていました。

「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです。」

青年が祈るようにそう答えました。

そしてあの姉弟はもうつかれてめいめいぐったり席によりかかって睡っていました。さっきのあのはだしだった足にはいつか白い柔らかな靴をはいていたのです。

ごとごとごとと汽車はきらびやかな燐光の川の岸を進みました。向うの方の窓を見ると、野原

はまるで幻燈のようでした。百も千もの大きさまぎまの三角標、その大きなものの上には赤い点点をうった測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集ってぼおつと青白い霧のよう、そこからかまたはもつと向うからかときどきまぎまの形のぼんやりした狼煙のようなものが、かわるがわるきれいな桔梗いろのそらにうちあげられるのでした。じつにそのすきとおった奇麗な風は、ばらの匂でいっぱいでした。

「いかがですか。こういう苹果はおはじめてでしょう。」向うの席の燈台看守がいつか黄金と紅でうつくしくいろどられた大きな苹果を落さないように両手で膝の上にかかえていました。

「おや、どつから来たのですか。立派ですねえ。ここらではこんな苹果ができるのですか。」青年はほんとうにびつくりしたらしく燈台看守の両手にかかえられた1もりの苹果を眼を細くしたり首をまげたりしながらわれを忘れてながめていました。

「いや、まあおとり下さい。どうか、まあおとり下さい。」

青年は1つとってジョバンニたちの方をちよつと見ました。

「さあ、向うの坊ちゃんがた。いかがですか。おとり下さい。」

ジヨバンニは坊ちゃんといわれたのですこししゃくにさわってだまっていたがカムパネルラは

「ありがとう、」と云いました。すると青年は自分でとって1つずつ2人に送ってよこしましたのでジヨバンニも立ってありがとうと云いました。

燈台看守はやつと両腕があいたのでこんどは自分で1つずつ睡っている姉弟の膝にそつと置きました。

「どうもありがとう。どこでできるのですか。こんな立派な苹果は。」

青年はつくづく見ながら云いました。

「この辺ではもちろん農業はいたしますけれども大ていひとりでいいものができそうな約束になつて居ります。農業だつてそんなに骨は折れはしません。たいてい自分の望む種子さえ播けばひとりでにどんどんできます。米だつてパシフィック辺のように殻もないし10倍も大きくて匂もいいのです。けれどもあなたがたのいらっしゃる方なら農業はもうありません。苹果だつてお菓子だつてかすが少しもありませんからみんなそのひとそのひとによってちがったわずかのいいかおりにな

って毛あなからちらけてしまうのです。」

にわかに男の子がぼちり眼をあいて云いました。

「ああよくいまお母さんの夢をみていたよ。お母さんがね立派な戸棚や本のあるところに居てね、ぼくの方を見て手をだしてにこにこにこわらったよ。よくおつかさん。りんごをひろつてきてあげましょうか云ったら眼がさめちゃった。ああここさっきの汽車のなかだねえ。」

「その苹果がそこにあります。このおじさんにいただいたのですよ。」青年が云いました。

「ありがとうございます。おや、かおるねえさんまだねてるねえ、よくおこしてやろう。ねえさん。ごらん、りんごをもらったよ。おきてごらん。」

姉はわらって眼をさましまぶしそうに両手を眼にあててそれから苹果を見ました。男の子はまるでパイを喰べるようにもうそれを喰べていました、また折角剥いたそのきれいな皮も、くるくるコルク抜きのような形になって床へ落ちるまでの間にはすうっと、灰いろに光って蒸発してしまうのでした。

2人はりんごを大切にポケットにしまいました。

川下の向う岸に青く茂った大きな林が見え、その枝には熟してまっ赤に光る円い実がいっぱい、その林のまん中に高い高い三角標が立って、森の中からはオーケストラベルやジロフォンにまじって何とも云えずきれいな音いろが、とけるように浸みるように風につれて流れて来るのでした。

青年はぞくつとしてからだをふるうようにしました。

だまってその譜を聞いていると、そこらにいちめん黄いろやうすい緑の明るい野原か敷物かがひろがり、またまっ白な蠟のような露が太陽の面を擦めて行くように思われました。

「まあ、あの烏。」カムパネルラのとりのかおると呼ばれた女の子が叫びました。

「からすでない。みんなかささぎだ。」カムパネルラがまた何気なく叱るように叫びましたので、ジヨバンニはまた思わず笑い、女の子はきまり悪そうにしました。まったく河原の青じろいあかりの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっぱいに列になってとまってじつと川の微光を受けているのでした。

「かささぎですねえ、頭のうしろのところに毛がぴんと延びてますから。」青年はとりなすように云いました。

向うの青い森の中の三角標はすっかり汽車の正面にきました。そのとき汽車のずうつとうしろの方からあの聞きなれた 番の讚美歌のふしが聞えてきました。よほどの人数で合唱しているらしいのでした。青年はさつと顔いろが青ざめ、たつて一ぺんそっちへ行きそうにしましたが思いかえしてまた座りました。かおる子はハンケチを顔にあててしまいました。ジョバンニまで何だか鼻が変になりました。けれどもいつともなく誰ともなくその歌は歌い出されだんだんはつきり強くなりました。思わずジョバンニもカムパネルラも一緒にうたい出したのです。

そして青い橄欖の森が見えない天の川の向うにさめざめと光りながらだんだんうしろの方へ行つてしまいそこから流れて来るあやしい楽器の音ももう汽車のひびきや風の音にすり耗らされてずうつとかすかになりました。

「あ孔雀が居るよ。」

「ええたくさん居たわ。」女の子がこたえました。

ジョバンニはその小さく小さくなつていまはもう1つの緑いろの貝ぼたんのように見える森の上にさっさと青じろく時々光つてその孔雀がはねをひろげたりとじたりする光の反射を見ました。

「そうだ、孔雀の声だつてさつき聞えた。」カムパネルラがおる子に云いました。

「ええ、30正ぐらいはたしかに居たわ。ハーブのように聞えたのはみんな孔雀よ。」女の子が答えました。ジョバンニは俄かに何とも云えずかなしい気がして思わず

「カムパネルラ、ここからはねおりて遊んで行こうよ。」とこわい顔をして云おうとしたくらいでした。

川は2つにわかれてました。そのまっくらな島のまん中に高い高いやぐらが1つ組まれてその上に1人の寛い服を着て赤い帽子をかぶった男が立っていました。そして両手に赤と青の旗をもつてそれを見上げて信号しているのです。ジョバンニが見ている間その人はしきりに赤い旗をふっていました。が俄かに赤旗をおろしてうしろにかくすようにし青い旗を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者のように烈しく振りました。すると空中にざあつと雨のような音がして何かまっくらなものがいくかたまりもいくかたまりも鉄砲丸のように川の向うの方へ飛んで行くのでした。ジョバンニは思わず窓からからだを半分出してそっちを見あげました。美しい美しい桔梗いろのがらんとした空の下を実に何万という小さな鳥どもが幾組も幾組もめいめいせわしくせわしく鳴いて通つて

行くのでした。

「鳥が飛んで行くな。」ジョバンニが窓の外で云いました。

「どら、」カムパネルラもそらを見ました。そのときあのやぐらの上のゆるい服の男は俄かに赤い旗をあげて狂気のようにふりうごきました。するとぴたと鳥の群は通らなくなりそれと同時にぴしゃあんという潰れたような音が川下の方で起ってそれからしばらくししいんとしました。と思ったらあの赤帽の信号手がまた青い旗をふって叫んでいたのです。

「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥。」その声もはっきり聞えました。それといっしょにまた幾万という鳥の群がそらをまっすぐにかけたのです。2人の顔を出しているまん中の窓からあの女の子が顔を出して美しい頬をかがやかせながらそらを仰ぎました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそらのきれいなこと。」女の子はジョバンニにはなしかけましたけれどもジョバンニは生意気ないやだいと思ひながらだまって口をむすんでそらを見あげていました。女の子は小さくほっと息をしてだまって席へ戻りました。カムパネルラが気の毒そうに窓から顔を引っ込めて地図を見ていました。

「あの人鳥へ教えてるんでしょか。」女の子がそつとカムパネルラにたずねました。

「わたり鳥へ信号してるんです。きつとどこからかのろしがあがるためでしょう。」カムパネルラが少しおぼつかなそうに答えました。そして車の中はいいんとなりました。ジョバンニはもう頭を引っ込めたかったですけれども明るいそこへ顔を出すのがつらかったのでだまってこらえてそのまま立って口笛を吹いていました。

（どうして僕はこんなにかなしのたろう。僕はもつところもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうつと向うにまるでけむりのような小さな青い火が見える。あれはほんとうにしずかでつめたい。僕はあれをよく見てここちもちをしずめるんだ。）ジョバンニは熱くて痛いあたまを両手で押えるようにしてそっちの方を見ました。（ああほんとうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだろうか。カムパネルラだってあんな女の子とおもしろそうに談しているし僕はほんとうにつらいなあ。）ジョバンニの眼はまた泪でいっぱいになり天の川もまるで遠くへ行ったようにほんやり白く見えるだけでした。

そのとき汽車はだんだん川からはなれて崖の上を通るようになりました。向う岸もまた黒いいろ

の崖が川の岸を下流に下るにしたがってだんだん高くなって行くのでした。そしてちらっと大きなとうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう美しい緑いろの大きな苞が赤い毛を吐いて真珠のような実もちらっと見えたのでした。それはだんだん数を増して来てもういまは列のように崖と線路との間にならび思わずジョバンニが窓から顔を引っ込めて向う側の窓を見ましたときは美しいその野原の地平線のはてまでその大きなとうもろこしの木がほとんどいちめんに植えられてさやさや風にゆらぎその立派なちぢれた葉のさきからはまるでひるの間にいっぱい日光を吸った金剛石のように露がいっぱいについて赤や緑やきらきら燃えて光っているのです。カムパネルラが「あれとうもろこしだねえ」とジョバンニに云いましたけれどもジョバンニはどうしても気持がなおりませんでしたからだだぶつきり棒に野原を見たまま「そうだろう。」と答えました。そのとき汽車はだんだんしずかになっていくつかのシグナルとてんてつ器の灯を過ぎ小さな停車場にとまりました。

その正面の青じろい時計はかっきり第2時を示しその振子は風もなくなり汽車もうごかずしずかなしずかな野原のなかにカチツカチツと正しく時を刻んで行くのでした。

そしてまったくその振子の音のたえまを遠くの遠くの野原のはてから、かすかなかすかな旋律が糸のように流れて来るのでした。「新世界交響楽だわ。」姉がひとりごとのようにこつちを見ながらそっと云いました。全くもう車の中ではあの黒服の丈高い青年も誰もみんなやさしい夢を見ているのでした。

（こんなしずかないところで僕はどうしてもっと愉快になれないだろう。どうしてもこんなにひとりでさびしいのだろう。けれどもカムパネルラなんかあんまりひどい、僕といっしょに汽車に乗っているがらまるであんな女の子とばかり談しているんだもの。僕はほんとうにつらい。）ジヨバンニはまた両手で顔を半分かくすようにして向うの窓のそとを見つけていました。すきとおった硝子のような笛が鳴って汽車はしずかに動き出し、カムパネルラもさびしそうに星めぐりの口笛を吹きましました。

「ええ、ええ、もうこの辺はひどい高原ですから。」うしろの方で誰かとしよりらしい人のいま眼がさめたという風ではきはき談している声がありました。

「とうもろこしだって棒で2尺も孔をあけておいてそこへ播かないと生えないんです。」

「そうですか。川まではよほどありましたよかねえ、」

「ええええ河までは2千尺から6千尺あります。もうまるでひどい峡谷になってるんです。」

そうそうここはコロラドの高原じゃなかったろうか、ジョバンニは思わずそう思いました。カムパネルラはまださびしそうにひとり口笛を吹き、女の子はまるで絹で包んだ苹果のような顔いろをしてジョバンニの見る方を見ているのでした。突然とうもろこしがなくなって巨きな黒い野原がいつぱいにひらけました。新世界交響楽はいよいよはつきり地平線のはてから湧きそのまっ黒な野原のなかを1人のインデアンが白い鳥の羽根を頭につけたくさんの石を腕と胸にかざり小さな弓に矢を番えて一目散に汽車を追って来るのでした。

「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。ごらんなさい。」

黒服の青年も眼をさしました。ジョバンニもカムパネルラも立ちあがりました。

「走って来るわ、あら、走って来るわ。追いかけてるんですよ。」

「いいえ、汽車を追ってるんじゃないんですよ。猟をするか踊るかしてるんですよ。」青年はいまどこに居るか忘れたという風にポケットに手を入れて立ちながら云いました。

まったくインデアンは半分は踊っているようでした。第一かけるにしても足のふみようがもつと経済もとれ本気にもなれそうでした。にわかにくつきり白いその羽根は前の方へ倒れるようになりインデアンはぴたと立ちどまってすばやく弓を空にひきました。そこから1羽の鶴がふらふらと落ちて来てまた走り出したインデアンの大きくひろげた両手に落ちこみました。インデアンはうれしそうに立ってわらいました。そしてその鶴をもつてこっちを見ている影ももうどんどん小さく遠くなり電しんばしらの碍子がきらつきらつと続いて2つばかり光ってまたとうもろこしの林になってしまいました。こっち側の窓を見ますと汽車はほんとうに高い高い崖の上を走っていてその谷の底には川がやっぱり幅ひろく明るく流れていたのです。

「ええ、もうこの辺から下りです。何せこんどは一ぺんにあの水面までおりて行くんですから容易じゃありません。この傾斜があるもんですから汽車は決して向うからこっちへは来ないんです。そろ、もうだんだん早くなったでしょう。」さっきの老人らしい声が云いました。

どんどんどん汽車は降りて行きました。崖のはじめに鉄道がかかるときは川が明るく下にのぞけたのです。ジョバンニはだんだんこころもちが明るくなって来ました。汽車が小さな小屋の前を

通つてその前にしょんぼりひとりの子供が立つてこっちを見ているときなどは思わずほうと叫びました。

どんどんどん汽車は走つて行きました。室中のひとたちは半分うしろの方へ倒れるようになりながら腰掛にしっかりとしがみついていました。ジョバンニは思わずカムパネルラとわらいました。もうそして天の川は汽車のすぐ横手をいままでよほど激しく流れて来たらしくときどきちらちら光つてながれているのでした。うすあかい河原なでこの花があちこち咲いていました。汽車はようやく落ちて着いたようにゆっくりと走っていました。

向うとこつちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旗がたっていました。

「あれ何の旗だろうね。」ジョバンニがやっとものを云いました。

「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟がおいであるねえ。」

「ああ。」

「橋を架けるとこじゃないんですか。」女の子が云いました。

「あああれ工兵の旗だねえ。架橋演習をしてるんだ。けれど兵隊のかたちが見えないねえ。」

その時向う岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水がぎらつと光って柱のように高くはねあがりどおと烈しい音がしました。

「発破だよ、発破だよ。」カムパネルラはこおどりました。

その柱のようになった水は見えなくなり大きな鮭や鱒がきらつきらつと白く腹を光らせて空中に抛り出されて円い輪を描いてまた水に落ちました。ジヨバンニはもうはねあがりたいくらい気持ちが軽くなって云いました。

「空の工兵大隊だ。どうだ、鱒やなんかがまるでこんなになつてはねあげられたねえ。僕こんな愉快な旅はしたことない。いいねえ。」

「あの鱒なら近くで見たらこれくらいあるねえ、たくさんさかな居るんだな、この水の中に。」

「小さなお魚もいるんでしょうか。」女の子が談につり込まれて云いました。

「居るんでしょう。大きなのが居るんだから小さいのもいるんでしょう。けれど遠くだからいま小さいの見えなかったねえ。」ジヨバンニはもうすっかり機嫌が直って面白そうにわらって女の子に答えました。

「あれきつと双子のお星さまのお宮だよ。」男の子がいきなり窓の外をさして叫びました。

右手の低い丘の上に小さな水晶でもこさえたような2つのお宮がならんで立っていました。

「双子のお星さまのお宮って何だい。」

「あたし前になんべんもお母さんから聴いたわ。ちゃんと小さな水晶のお宮で2つならんでいるからきつとそうだわ。」

「はなしてごらん。双子のお星さまが何したつての。」

「ぼくも知ってらい。双子のお星さまが野原へ遊びにでてからすと喧嘩したんだろう。」

「そうじゃないわよ。あのね、天の川の岸にね、おっかさんお話なすったわ、……」

「それから彗星がギーギーフリーフリーて云って来たねえ。」

「いやだわたあちゃんそうじゃないわよ。それはべつの方だわ。」

「するとあすこにいま笛を吹いて居るんだろうか。」

「いま海へ行つてらあ。」

「いけないわよ。もう海からあがつていらっしやったのよ。」

「そうそう。ぼく知つてらあ、ぼくおはなししよう。」

川の向う岸が俄かに赤くなりました。楊の木や何かもまっ黒にすかし出され見えない天の川の波もとどきどきちらちら針のように赤く光りました。まったく向う岸の野原に大きなまっ赤な火が燃え、それの黒いけむりは高く桔梗いろのつめたそうな天をも焦がしそうでした。ルビーよりも赤くすきとおりのチウムよりもうつくしく酔つたようになってその火は燃えているのでした。

「あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう。」ジヨバンニが云いました。

「蝸の火だな。」カムパネルラが又地図と首っ引きして答えました。

「あら、蝸の火のことならあたし知つてゐるわ。」

「蝸の火ってなんだい。」ジヨバンニがききました。

「蝸がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聞いたわ。」

「蝸って、虫だろう。」

「ええ、蝸は虫よ。だけどいい虫だわ。」

「蝎いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあつてそれで螫されると死ぬって先生が云ったよ。」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さん斯う云ったのよ。むかしのバルドラの野原に1びきの蝎がいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていたんですって。するとある日いたちに見附かつて食べられそうになったんですって。さそりは一生けん命遁げて遁げたけどとうとういたちに押えられそうになったわ、そのときいきなり前に井戸があつてその中に落ちてしまったわ、もうどうしてもあがられないでさそりは溺れはじめたのよ。そのときさそりは斯う云つてお祈りしたというの、

ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとったかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになつてしまった。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちに呉れてやらなかったらう。そしたらいたちも1日生きのびたらうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにもなく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかい下さい。って云つたというの。そしたらいつか蝎はじぶんのからだがまっ赤なうつくしい火になつ

て燃えてよるのやみを照らしているのを見たつて。いまでも燃えてるつてお父さん仰ったわ。ほんとうにあの火それだわ。」

「そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちょうどさそりの形にならんでいるよ。」

ジヨバンニはまったくその大きな火の向うに3つの三角標がちょうどさそりの腕のようにこつちに5つの三角標がさそりの尾やかぎのようにならんでいるのを見ました。そしてほんとうにそのまっ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。

その火がだんだんうしろの方になるにつれてみんなは何とも云えずにぎやかなさまざまの樂の音や草花の匂のようなもの口笛や人々のざわざわ云う声やらを聞きました。それはもうじきかくに町か何かがあつてそこにお祭でもあるというような気がするのです。

「ケンタウル露をふらせ。」いきなりいままで睡っていたジヨバンニのとなりの男の子が向うの窓を見ながら叫んでいました。

ああそこにはクリスマストリイのようにまっ青な唐檜かみみの木がたつてその中にはたくさんのおくさんの豆電燈がまるで千の蛍でも集ったようについていました。

「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だねえ。」

「ああ、ここはケンタウル村だよ。」カムパネルラがすぐ云いました。「以下原稿1枚？なし」

「ボール投げなら僕決してはずさない。」

男の子が大威張りで云いました。

「もうじきサウザンクロスです。おりの支度をして下さい。」青年がみんなに云いました。

「僕も少し汽車へ乗ってるんだよ。」男の子が云いました。カムパネルラのとりの女の子はそわそわ立って支度をはじめましたけれどもやっぱりジョバンニたちとわかれたくないようなようすでした。

「ここでおりないといけないのです。」青年はきちつと口を結んで男の子を見おろしながら云いました。

「厭だ。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい。」

ジョバンニがこらえ兼ねて云いました。

「僕たちと一緒に乗って行こう。僕たちどこまでだって行ける切符持ってるんだ。」

「だけどあたしたちもうここで降りないといけないのよ。ここ天上へ行くとこなんだから。」女の子がさびしそうに云いました。

「天上へなんか行かなくなつていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりもつといいところをこさえなければいけないって僕の先生が云つたよ。」

「だつておつ母さんも行つてらっしゃるしそれに神さまが仰っしゃるんだわ。」

「そんな神さまうその神さまだい。」

「あなたの神さまうその神さまよ。」

「そうじゃないよ。」

「あなたの神さまってどんな神さまですか。」青年は笑いながら云いました。

「ぼくほんとうはよく知りません、けれどもそんなでなしにほんとうのたった1人の神さまです。」

「ほんとうの神さまはもちろんたった1人です。」

「ああ、そんなでなしにたったひとりのほんとうの神さまです。」

「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります。」青年はつましく両手を組みました。女の子もちょうどその通りにしました。みんなほんとうに別れが惜しそうでその顔いろも少し青ざめて見えました。ジョバンニはあぶなく声をあげて泣き出そうとしました。

「さあもう支度はいいんですか。じきサウザンクロスですから。」

ああそのときでした。見えない天の川のずうっと川下に青や橙やもうあらゆる光でちりばめられた十字架がまるで1本の木という風に川の中から立ってかがやきその上には青じろい雲がまるい環になって後光のようにかかっているのです。汽車の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのようにまっすぐに立ってお祈りをはじめました。あっちにもこっちにも子供が瓜に飛びついたときのようなよろこびの声や何とも云いようない深いつましいためいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架は窓の正面になりあの苹果の肉のような青じろい環の雲もゆるやかにゆるやかに繞っているのが見えました。

「ハルレヤハルレヤ。」明るくたのしくみんなの声はひびきみんなはそのそのその遠くからつめたい

そらの遠くからすきとおった何とも云えずさわやかなラッパの声をききました。そしてたくさんのシグナルや電燈の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかになりとうとう十字架のちょうどま向いに行つてすつかりとまりました。

「さあ、下りるんですよ。」青年は男の子の手をひきだんだん向うの出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら。」女の子がふりかえつて2人に云いました。

「さよなら。」ジョバンニはまるで泣き出したいのをこらえて怒つたようにぶつき棒に云いました。女の子はいかにもつらそうに眼を大きくしても1度こつちをふりかえつてそれからあとはもうだまって出て行つてしまいました。汽車の中はもう半分以上も空いてしまい俄かにがらんとしてさびしくなり風がいっぱいに吹き込みました。

そして見ているとみんなはつつましく列を組んであの十字架の前の天の川のなぎさにひざまずいていました。そしてその見えない天の川の水をわたつてひとりの神々しい白いきもの人が手をのばしてこつちへ来るのを2人は見ました。けれどもそのときはもう硝子の呼子は鳴らされ汽車はうごき出しと思ううちに銀いろの霧が川下の方からすうっと流れて来てもうそつちは何も見えなくな

りました。ただたくさんのくるみの木が葉をさんさんと光らしてその霧の中に立ち黄金の円光をもった電気栗鼠が可愛い顔をその中からちらちらのぞいているだけでした。

そのときすうっと霧がはれかかりました。どこかへ行く街道らしく小さな電燈の1列についた通りがありました。それはしばらく線路に沿って進んでいました。そして2人がそのあかしの前を通って行くときはその小さな豆いろの火はちょうど挨拶でもするようにぽかっと消え2人が過ぎて行くときまた点くのです。

ふりかえって見るとさっきの十字架はすっかり小さくなってしまいほんとうにもうそのまま胸にも吊されそうになり、さっきの女の子や青年たちがその前の白い渚にまだひざまずいているのかそれともどこか方角もわからないその天上へ行ったのかほんやりして見分けられませんでした。

ジョバンニはああと深く息しました。

「カムパネルラ、また僕たち2人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はどうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸のためならば僕の中からだなんか百ぺん灼いてもかまわない。」

「うん。僕だつてそくだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙がうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう。」ジョバンニが云いました。

「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云いました。

「僕たちしつかりやろうねえ。」ジョバンニが胸いっぱい新らしい力が湧くようにふうと息をしながら云いました。

「あ、あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ。」カムパネルラが少しそちを避けるようにしながら天の川のひととこを指さしました。ジョバンニはそちを見てまるでぎくつとしてしまいました。天の川の一とこに大きなまっくらな孔がほんとあっているのです。その底がどれほど深いかその奥に何があるかいくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えずただ眼がしんと痛むのでした。ジョバンニが云いました。

「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。きつとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行こう。」

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集つてゐるねえ。あすこがほ

んとうの天上なんだ。あつあすこにいるのぼくのお母さんだよ。」カムパネルラは俄かに窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。

ジョバンニもそっちを見ましたけれどもそこはほんやり白くけむっているばかりどうしてもカムパネルラが云ったように思われませんでした。何とも云えずさびしい気がしてほんやりそっちを見ていましたら向うの河岸に2本の電信ばしらが丁度両方から腕を組んだように赤い腕木をつらねて立っていました。

「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ。」ジョバンニが斯う云いながらふりかえって見ましたらそのいままでカムパネルラの座っていた席にもうカムパネルラの形は見えずただ黒いびろうどばかりひかっていました。ジョバンニはまるで鉄砲丸のように立ちあがりました。そして誰にも聞えないように窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうって叫びそれからもう咽喉いっぱい泣きだしました。もうそこらが一ぺんにまっくらになつたように思いました。

ジョバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむっていたのでした。胸は何だかおかしく熱り頬にはつめたい涙がながれていました。

ジヨバンニはばねのようにはね起きました。町はすっかりさっきの通りに下でたくさんの灯を綴ってはいましたがその光はなんだかさつきよりは熱したという風でした。そしてたったいま夢であるいた天の川もやつぱりさっきの通りに白くぼんやりかかりまっ黒な南の地平線の上では殊にけむったようになってその右には蠍座の赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置はそんなに変わってもいないようでした。

ジヨバンニは一さんに丘を走って下りました。まだ夕ごはんをたべないで待っているお母さんのことが胸いっぱい思いだされたのです。どんどん黒い松の林の中を通ってそれからほの白い牧場の柵をまわってさっきの入口から暗い牛舎の前へまた来ました。そこには誰かがいま帰ったらしくさっきなかった1つの車が何かの樽を2つ乗つけて置いてありました。

「今晚は、」ジヨバンニは叫びました。

「はい。」白い太いずぼんをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「何のご用ですか。」

「今日牛乳がぼくのところへ来なかったのですが」

「あ済みませんでした。」その人はすぐ奥へ行つて1本の牛乳瓶をもつて来てジョバンニに渡しなが
がらまた云いました。

「ほんとうに、済みませんでした。今日はひるすぎうつかりしてこうしの棚をあけて置いたもんで
すから大将早速親牛のところへ行つて半分ばかり吞んでしまひましてね……」その人はわらいまし
た。

「そうですか。ではいただいて行きます。」

「ええ、どうも済みませんでした。」

「いいえ。」

ジョバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のでのひらで包むようにもつて牧場の柵を出ました。

そしてしばらく木のある町を通つて大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になつて
その右手の方、通りのはずれにさつきカムパネルラたちのあかりを流しに行つた川へかかった大き
な橋のやぐらが夜のそらにぼんやり立っていました。

ところがその十字になった町かどや店の前に女たちが78人ぐらいつつ集つて橋の方を見ながら

何かひそひそ談しているのです。それから橋の上にもいろいろなあかりがいつぱいなのでした。

ジョバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなったように思いました。そしていきなり近くの人たちへ

「何かあつたんですか。」と叫ぶようにききました。

「こどもが水へ落ちたんですよ。」1人が云いますとその人たちは一斉にジョバンニの方を見ました。ジョバンニはまるで夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人でいっぱい、河が見えませんでした。白い服を着た巡査も出ていました。

ジョバンニは橋の袂から飛ぶように下の広い河原へおりました。

その河原の水際に沿ってたくさんの方のあかりがせわしくのぼったり下ったりしていました。向う岸の暗いどてにも火が7つ8つうごいていました。そのまん中をもう烏瓜のあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろにしずかに流れていたのでした。

河原のいちばん下流の方へ州のようになって出たところに人の集りがくつきりまつ黒に立っていました。ジョバンニはどんどんそっちへ走りしました。するとジョバンニはいきなりさつきカムパネ

ルラといっしょだったマルソに会いました。マルソがジョバンニに走り寄ってきました。

「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ。」

「どうして、いつ。」

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこったろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ。」

「みんな探してるんだろう。」

「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附からないんだ。ザネリはうちへ連れられてった。」

ジョバンニはみんなの居るそっちの方へ行きました。そこに学生たち町の人たちに囲まれて青じろい尖ったあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服を着てまっすぐに立って右手に持った時計をじっと見つめていたのです。

みんなもじつと河を見ていました。誰も一言も物を云う人もありませんでした。ジヨバンニはわくわくわくわく足がふるえました。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行ったり来たりして黒い川の水はちらちら小さな波をたてて流れているのが見えるのでした。

下流の方は川はば一ぱい銀河が巨きく写ってまるで水のないそのままのそらのように見えませんでした。

ジヨバンニはそのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかないというような気がしてしかたなかったのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずいぶん泳いだぞ。」と云いながらカムパネルラが出て来るか或いはカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立っていて誰かの来るのを待っているかというような気がして仕方ないらしいのでした。けれども俄かにカムパネルラのお父さんがきつぱり云いました。

「もう駄目です。落ちてから45分たちましたから。」

ジヨバンニは思わずかけよって博士の前に立って、ぼくはカムパネルラの行った方を知っていま

すぼくはカムパネルラといっしょに歩いてたのですと云おうとしましたがもうのどがつまって何とも云えませんでした。すると博士はジョバンニが挨拶に来たとも思ったのですか、しばらくしげしげジョバンニを見ていました

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晚はありがとう。」と町ねいに云いました。

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか。」博士は堅く時計を握ったまままたききました。

「いいえ。」ジョバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ。ぼくには一昨日大へん元気な使りがあつたんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。ジョバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」

そう云いながら博士はまた川下の銀河のいっばいにうつった方へじつと眼を送りました。

ジョバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいでなんにも云えずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の方